

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

八人塚遺跡

1979

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

西部開発事業（畠地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

八人塚遺跡

1979

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

序

近年、考古学に関する情報がマスコミュニケーションを通して、公表される機会が数多くなってきました。それとともに、考古学に対する、一般市民の理解も高まってまいりました。先人達が営んだ生活の場が遺跡であり、また先人達が埋葬された場が古墳であります。これらの遺跡は地下に破壊されることなく埋めておくことが最もぞましい姿であります、いつまでも、そのような状態におくことが不可能な事態がここ数年来、伊那谷にも押し寄せてまいりました。それは中央道開通、各種の土地改良事業であります。

今回の八人塚遺跡は西部開発事業に伴なう土地改良事業のために現状保存が不可能となり、各種学術団体より、その価値が指摘され、調査の運びとなった次第であります。

調査は昭和58年4月から5月にかけて実施されました。調査にあたりましては、上伊那考古学会の諸先生並びに南信土地改良事務所職員一同、地元作業員の方々の心からなる御協力により調査が完了したことにして深甚なる感謝を呈する次第であります。

昭和54年8月8日

伊那市教育委員会

教育長 伊沢 一雄

凡 例

1. 今回の発掘調査は県営圃場整備に伴なう、土地改良事業で、第6次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で、国・県・市の補助金のもとに、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和58年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美 田畠辰雄

◎ 図版作製者

○ 造構及び地形

友野良一 飯塚政美 田畠辰雄

◎ 写真撮影

○ 発掘及び造構

友野良一 飯塚政美 田畠辰雄

○ 遺 物

友野良一 飯塚政美 田畠辰雄

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

目 次

序

凡 例

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

| | |
|--------------------|-------------|
| 第Ⅰ章 環 境 | (1 ~ 3) |
| 第1節 位 置 | (1) |
| 第2節 地形・地質 | (1) |
| 第3節 周辺遺跡との関連 | (1 ~ 2) |
| 第Ⅱ章 発掘調査の経過 | (4 ~ 7) |
| 第1節 発掘調査の経緯 | (4) |
| 第2節 調査の組織 | (4) |
| 第3節 発掘日誌 | (5 ~ 7) |
| 第Ⅲ章 造 構 | (8 ~ 18) |
| 第1節 住居址 | (10 ~ 15) |
| 第2節 土 塚 | (16 ~ 18) |
| 第Ⅳ章 造 物 | (19 ~ 22) |
| 第1節 土 器 | (19 ~ 21) |
| 第2節 石 器 | (21 ~ 22) |
| 第Ⅴ章 ま と め | (22 ~ 23) |

挿 図 目 次

| | | |
|--------|-----------------|-----------|
| 第 1 図 | 竜西地区遺跡分布図 | (2) |
| 第 2 図 | 地形図 | (3) |
| 第 3 図 | 遺構配置図 | (8 ~ 9) |
| 第 4 図 | 第 1 号住居址実測図 | (10) |
| 第 5 図 | 第 2 号住居址実測図 | (11) |
| 第 6 図 | 第 3 ~ 6 号住居址実測図 | (12) |
| 第 7 図 | 第 8 号住居址炉址断面図 | (13) |
| 第 8 図 | 第 4 号住居址実測図 | (13) |
| 第 9 図 | 第 4 号住居址炉址断面図 | (14) |
| 第 10 図 | 第 5 号住居址実測図 | (14) |
| 第 11 図 | 第 7 号住居址実測図 | (15) |
| 第 12 図 | 第 7 号住居址炉址断面図 | (16) |
| 第 13 図 | 第 1 号土塙実測図 | (16) |
| 第 14 図 | 第 2 号土塙実測図 | (17) |
| 第 15 図 | 第 3 号土塙実測図 | (17) |
| 第 16 図 | 第 4 号土塙実測図 | (17) |
| 第 17 図 | 第 5 号土塙実測図 | (18) |
| 第 18 図 | 第 6 号土塙実測図 | (18) |
| 第 19 図 | 第 7 号土塙実測図 | (18) |

表 目 次

| | | |
|-------|------------|--------|
| 第 1 表 | 出土土器の形状一覧表 | (19) |
| 第 2 表 | 出土土器の形状一覧表 | (19) |
| 第 3 表 | 出土土器の形状一覧表 | (20) |
| 第 4 表 | 出土土器の形状一覧表 | (20) |
| 第 5 表 | 出土土器の形状一覧表 | (20) |
| 第 6 表 | 出土土器の形状一覧表 | (21) |
| 第 7 表 | 出土土器の形状一覧表 | (21) |
| 第 8 表 | 出土石器の形状一覧表 | (21) |
| 第 9 表 | 出土石器の形状一覧表 | (22) |

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡全景
- 図版 2 遺構
- 図版 3 遺構
- 図版 4 遺構
- 図版 5 遺構
- 図版 6 遺物出土状況
- 図版 7 出土土器
- 図版 8 出土土器
- 図版 9 出土土器
- 図版 10 出土土器
- 図版 11 出土土器
- 図版 12 出土土器
- 図版 13 出土土器
- 図版 14 出土石器
- 図版 15 出土石器
- 図版 16 住居址の土層埋没状況

第Ⅰ章 環 境

第1節 位 置

八人塚遺跡は、長野県伊那市大字伊那平沢部落に所在しています。遺跡地までの道順としては伊那市街地より、小沢川に沿って、西方へ4km程行くと、眼前には南北に走る中央高速道路のハイウェイが見え、さらに、同河川には、コンクリートの生きしさの残る橋梁の姿が眼に映える。これらのものは、現代の日本高度成長の成果を如実に物語っている。この橋附近の集落が小沢部落である。この附近から小沢川の両岸段丘も高くなり、したがって、道路の曲折する箇所も増す。このような情景を左右に見ながら西方へ4km程さか登っていくと、谷間に一大集落が見える。これが平沢部落である。今まで登ってきた道をさらに西方へいくと、芝原、南沢、与地部落の北沢を経て、最終的には権兵衛峠へと続いている。この部落の中央部附近にかかる小沢川の橋を渡り、右岸段丘のまわりくねった道を登り、段丘の上に出る。この段丘面をさらに南へ行き、下った所に伊那バスの穴沢停留所があり、停留所より南に見える段丘面が八人塚遺跡である。

第2節 地形・地質

「伊那市平沢地区は、竜西の小黒川左岸段丘面、小沢川右岸段丘面、山麓扇状地の三つの条件の重なった場所である。小黒川は木曾山脈茶臼山や将棋頭（標高2727m）の沢水を集め、その源を成し、旧西春近村と伊那市の境界を東流して、天竜川に流れ込んでいる。その距離は約11.5km、勾配は急であり、上流部に岩層が多い。急流で、他の同川に比して洪水時も土砂の流出が少ない。内萱発電所があり、水力発電所に利用されている。一方、小沢川は権兵衛峠を中にはさんだ南沢と北沢から流れ出るが、伊那市平沢の芝原で合流し、途中小沢で西天竜と合わせて伊那市内を流れ天竜川に通する。全長11km、南沢には南沢鉱泉がある。上流は崩壊箇所が多く、洪水の場合土砂や砾が一時的に多く流出する。」（上伊那郡誌 自然篇による）

第3節 周辺遺跡との関連

平沢部落周辺に点在する遺跡は7箇所あり、それは第1図竜西地区遺跡分布図により④の北方、⑤の矢塚畠、⑥の八人塚、⑦のおぐしづ、⑧の丸山清水、⑨の穴沢、⑩の閑畠の各遺跡である。北方遺跡は縄文中期、矢塚畠遺跡は縄文中期、おぐしづ遺跡は縄文中期・平安時代・中世、丸山清水遺跡は縄文中期・奈良・平安時代、穴沢遺跡は縄文中期、閑畠遺跡は縄文中期である。これらの遺跡のうちでいままでに調査された遺跡はおぐしづ遺跡、丸山清水遺跡で、これらは報告書が出版されています。

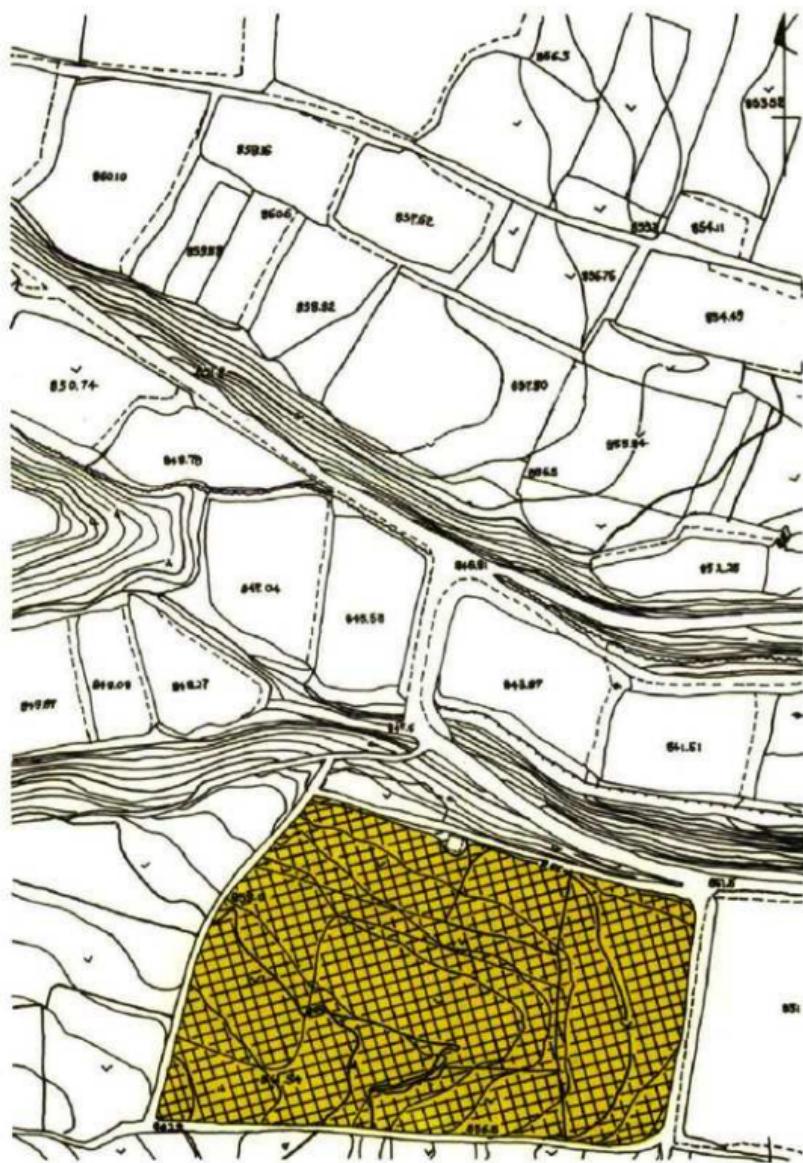
（飯塚政美）



第1図 竜西地区遺跡分布図

遺跡の名称

| | | | | |
|-----------|--------|-----------|----------|-------|
| 1 北 葉 | 19 鶴 庄 | 37 おぐし沢 | 55 城 | 73 水代 |
| 2 田 見 旗 | 20 天 て | 38 丸山裕水 | 56 小沢 | 74 本 |
| 3 古 見 旗 | 21 天 て | 39 穴 井 | 57 小沢神社 | 75 園 |
| 4 金 井 木 | 22 天 て | 40 ますみヶ丘上 | 58 月見松古墳 | 76 成 |
| 5 豊 山 | 23 白 下 | 41 忽 井 | 59 月 見 松 | 77 常 |
| 6 豊 山 | 24 下 食 | 42 京原 平 2 | 60 ウダイス園 | 78 吉 |
| 7 砧ヶ岳 | 25 食 | 43 京原 手 原 | 61 上 高 山 | 79 山 |
| 8 西武林小学校 | 26 富士塚 | 44 上 手 原 | 62 高 岛 恐 | 80 本 |
| 9 大 佐 西 | 27 富士塚 | 45 城 | 63 島 岩 | 81 佐 |
| 10 西武林中学校 | 28 富士塚 | 46 ますみヶ丘 | 64 石 今 塚 | 82 代 |
| 11 鹿野神社 | 29 上 花 | 47 赤 岩 | 65 駆 墓 | 83 本 |
| 12 古 士 家 | 30 小 中 | 48 伊 兵 井 | 66 外 | 84 田 |
| 13 在 高 枝 | 31 中 | 49 八人塚古墳 | 67 せん | 85 本 |
| 14 高 枝 | 32 与 地 | 50 駆 墓 | 68 かん | 86 佐 |
| 15 久 保 通 | 33 与 北 | 51 駆 墓 | 69 本 | 87 城 |
| 16 駆 墓 | 34 北 家 | 52 山 の 神 | 70 宮 | 下 島 |
| 17 中 通 南 | 35 家 | 53 小風南原 | 71 波 滅 | 島 |
| 18 佐 番 | 36 八人塚 | 54 吉 士 墓 | 72 伏 原 | 方 |



第2図 地形図 (1 : 1500)

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

横山、平沢地区の西部開発事業（畠地帯総合土地改良事業）は昭和51年12月に初めて着手されました。この地区での最初の発掘調査は横山地区のおぐし沢遺跡が該当しました。昭和52年度は、平沢地区の丸山清水遺跡が同年10月から11月にかけて発掘調査が行なわれ、前述した二遺跡は報告書となって記録保存という姿で後世に残ることになりました。昭和53年度では丸山清水遺跡と沢をはさんで南側の台地に所在している八人塚遺跡が該当地区に含まれました。この地区は他地区的水田の耕土に必要な土をはやく取って、本年度の作付けに間に合わせたいとの要求が強かつたために、調査を4月下旬より着手するよう準備を整えました。

事業主体者である南信土地改良事務所と委託先である伊那市長との間で、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結した。伊那市教育委員会では、契約後、ただちに発掘準備にとりかかれるように発掘調査団を開催し、八人塚遺跡発掘調査会を結成し、その中に調査団を含めて業務を遂行することにしました。

第2節 調査の組織

八人塚遺跡発掘調査会

調査委員会

| | | |
|-------|-------|----------------|
| 委員長 | 伊沢 一雄 | 伊那市教育委員会教育長 |
| 副委員長 | 福沢幹一郎 | 伊那市文化財審議委員会委員長 |
| 委 員 | 赤羽 映士 | 伊那市教育委員長 |
| " | 向山 述雄 | 南信土地改良事務所長 |
| 調査事務局 | 竹松 英夫 | 伊那市教育委員会社会教育課長 |
| " | 有賀 武 | " " 課長補佐 |
| " | 米山 博章 | " " 係長 |
| " | 三沢真知子 | " " 主事 |

発掘調査団

| | | |
|-----|-------|-----------|
| 団長 | 友野 良一 | 日本考古学协会会员 |
| 副団長 | 根津 清志 | 長野県考古学会会員 |
| " | 御子柴泰正 | " " |
| 調査員 | 飯塚 政美 | " " |
| " | 田畠 長雄 | " " |
| " | 福沢 幸一 | " " |

第2節 発掘日誌

昭和53年4月26日 本日は八人塚遺跡の初日である。現場に午前8時30分に調査員、作業員達が集合し、今後の発掘方針についての諸注意を聞いて調査のスムーズな進行を促進する。テントや発掘器材を伊那市教育委員会の倉庫より現場へ運搬する。まずテント張りよりとりかかる。発掘のベテラン調査員や作業員達の適切な指導や判断によって午前中一杯で、目印、休息地、発掘器材置場等多目的的な用途を果たす幕舎の完備ができた。午後は、荒地になつたり、桑畠となっていた場所を明日より調査の進行を考えて、邪魔なものを排除する。

昭和53年4月27日 昨日、整理をした場所へ重機を入れる。まず、桑を掘り込むために最初に抜根用のパワーシャベルを入れる。この作業は午前中一杯かかって終了する。午後よりブルトーザーによって耕土剥ぎを実施する。

昭和53年4月28日 本日より本格的な調査にとりかかる。まず、最初にグリットを設定する。発掘地区は面積が広いため、さらに微地形では各所に高低がみられたために区を4つに分ける。微地形はI区は西から東への傾斜、II区は北から南への傾斜、III区は東から北への傾斜、IV区は東から西への傾斜、北から南への傾斜であった。第I区は東から西へ1~17、南から北へA~W、第II区は南から北へA~O、東から西へ1~18、第III区は南から北へA~F、東から西へ1~46、第IV区は南から北へA~O、東から西へ1~27とグリットを設ける。

昭和53年4月29日 昨日、グリットを設定したので、I区のA1より掘り始める。I区C1~C8、D1~D8、E1~E8、F1~F8の範囲内に黒土の落ち込みがみられ、これを第1号住居址とする。本住居址のプランを確認するための拡張をしている。その他にグリット掘りを掘り進めていく。

昭和53年5月1日 本日より五月へ入った。いよいよ附近の若葉の青さが目立ち始める。昨日検出された第1号住居址の掘り下げを開始する。掘り下げていくと遺物の出土はかなりの量に達し、本址の中央部附近に炉の発見があった。五月晴れで青々とした空に體のぼりが泳いでいた。



発掘風景

昭和53年5月2日 夕方までかかって第1号住居址を完掘する。I区D9～D10、E9～E10、F9～F10のグリット内に円形状の黒土の落ち込みがみられ、第2号住居址とする。

昭和53年5月3日 本日は国民の祝日で休息日であるべきだが、都合により作業を実施する。第1号住居址の清掃をし、その写真撮影を終了する。第2号住居址のプラン確認にその全力を注ぎ込む。住居址の近くだけに上層部よりかなりの量の遺物が出土した。

昭和53年5月4日 第2号住居址の大般のプラン確認ができたので、その掘り下げを開始する。グリット掘りを第2号住居址の西側へ広げていく。

昭和53年5月5日 第2号住居址の掘り下げを進めていくと、南側の一角内床面上に黒い落ち込みが発見され、これを第1号土塗とする。本日一杯かかって、大般第2号住居址と土塗の完掘を終了する。本日で、国民が言っているゴールデンウイークの最後の祝日も終りである。

昭和53年5月6日 第2号住居址の清掃及び、その写真撮影を終了する。グリット掘りは一応、I区では西側で限界がきたので、北側へと掘り下げを進めていくと、遺物はかなりの量出土したが遺構は検出されなかった。

昭和53年5月8日 本日より第II区に入りAから掘り下げを進めていく。II区D11～D11、E10～E12、E10～F11のグリット内に黒土の落ち込みがみられ、第3号住居址とする。

昭和53年5月9日 第3号住居址の北側へ円形状の黒土の落ち込みがみられ、第4号住居址とする。第3号住居址の掘り下げを進めていくと、住居址の割合には遺物は少なかった。第3号住居址のプラン確認を進めていくと同時に、第4号住居址のプラン確認をする。

昭和53年5月10日 本日は第I区の北側のグリットへ掘り下げを進めていくとI区S12～S14、T12～T14のグリット内に黒土の落ち込みがみられ、第5号住居址とする。

昭和53年5月11日 第3号住居址と第4号住居址の掘り下げを進めていくと、どうも切り合い関係の具合になっており、その切られた住居址を第6号住居址とする。

昭和53年5月12日 第3号住居址と第4号住居址、第6号住居址のはば完掘を終了する。それによると、第3号住居址、第4号住居址は埋甕場になっていた。第6号住居址は第3号住居址に切らされているために、ほんのわずかに残されていた程度であった。

昭和53年5月13日 第3号住居址、第4号住居址、第6号住居址完掘及び清掃、さらに写真撮影を終了する。

昭和53年5月15日 前日の写真撮影のために、第3号住居址、第4号住居址、第6号住居址の周辺を拡張していると第4号住居址の南側に1カ所、第3号住居址の南側に2カ所それぞれ黒土の落ち込みがみられ、前より第2号土塗、第3号土塗、第4号土塗とし、ほぼその日のうちに完掘、清掃、さらに写真撮影を終了する。

昭和53年5月16日 第5号住居址の掘り下げを実施し、夕方までにはその完掘を済ませる。それによると炉は住居址の中央部附近にあり、凹み状になっており、さらに、なかえは小石が混入していた。それと同時に周辺のグリットを拡張した。本住居址の清掃及びその写真撮影をする。

昭和53年6月17日 本日は第I区の18～18ラインの南側のグリット掘りを進めていくが遺構及び遺物の出土はみられなかった。

昭和53年5月18日 本日は第Ⅰ区の北側のラインT～O、1～18ラインのグリット掘りを進めていくが、遺構及び遺物の検出はみられなかった。

昭和53年5月19日 本日はⅢ区のA1からA20ラインのグリット掘りをするが、遺構及び遺物の検出はみられなかった。

昭和53年5月20日 本日は第Ⅲ区のA21からA46ラインのグリット掘りをするが、遺構及び遺物の検出はみられなかった。第1号住居址、第2号住居址の平面及び断面実測を終了する。

昭和53年5月21日 本日は第Ⅳ区のA1～A20ラインのグリット掘りをするが、遺構及び遺物の検出はみられなかった。第8号住居址、第4号住居址、第6号住居址の平面及び断面実測をする。

昭和53年5月22日 本日は第Ⅴ区のA21～A27ラインを掘り下げていくと、2カ所に土塁がみられ、それぞれを第6号土塁、第7号土塁とし、一日で完掘し、写真撮影をする。

第5号住居址の平面及び断面実測をする。

昭和53年5月23日 昨日、ブルトーザーが水田用の耕土をとり除いていると、第Ⅵ区のB8～B5、C3～C5のグリット内に焼けた個所がみつかり、これを第7号住居址とする。プランを把握するために北西を拡張していると土塁状の落ち込みがみられ、第7号土塁とする。第1号土塁、第2号土塁、第3号土塁、第4号土塁、第5号土塁、第6号土塁の平面及び断面実測を終了する。

昭和53年5月24日 本日は第7号住居址の掘り下げ、第7号土塁の掘り下げを終了、完掘し、清掃及び写真撮影をする。

昭和53年5月25日 本日は発掘作業の最終日である。テントの取りこわし、発掘器材の点検及びその運搬を実施する。第7号住居址、第7号土塁の平面及び断面実測、全測図の作製

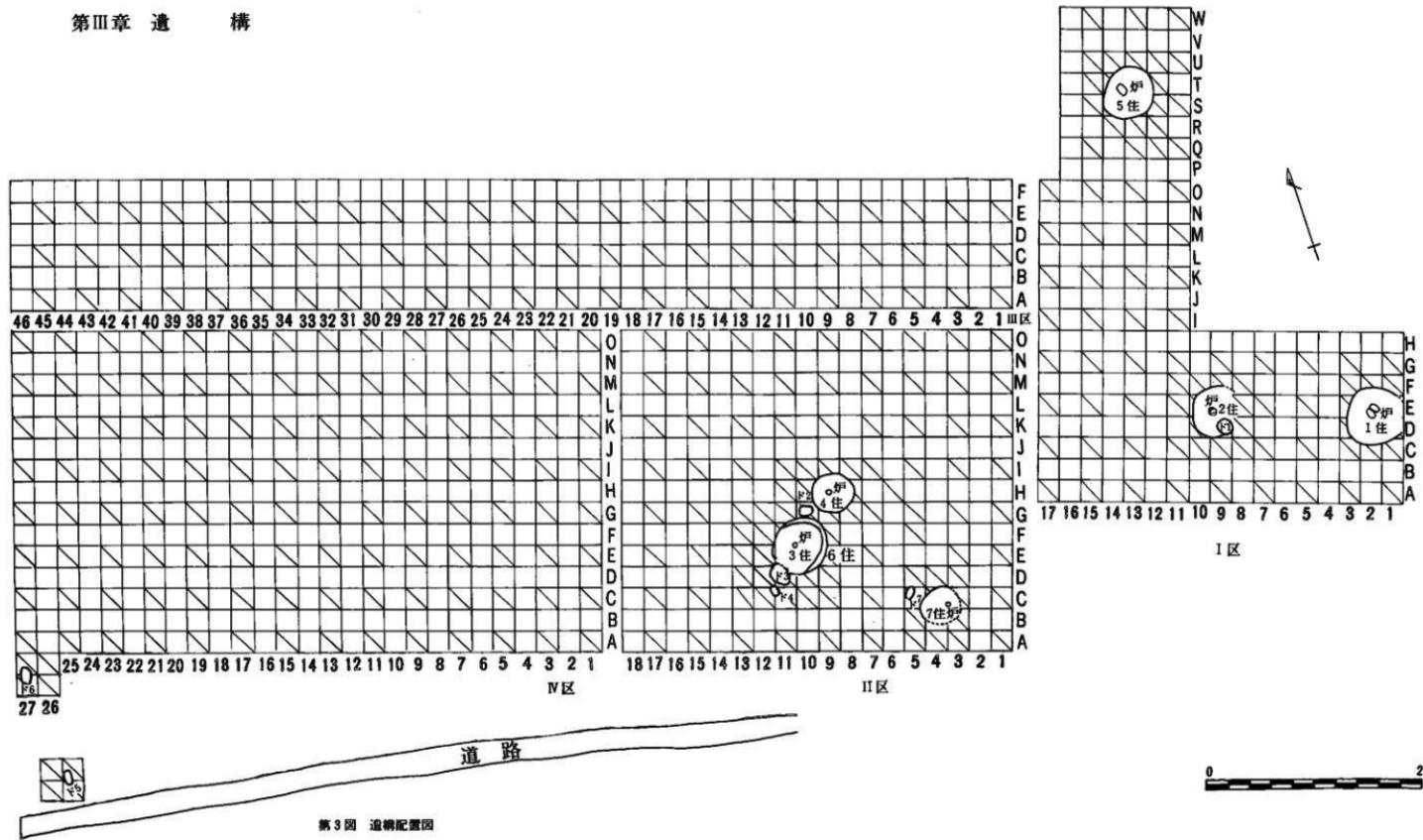
昭和54年1月～2月 報告書の図版及び実測図の作製

昭和54年2月 報告書の原稿作製、報告書を印刷所へ入れる。

昭和54年3月 報告書の刊行

(飯塚政美)

第III章 道 構



第3図 道構配置図



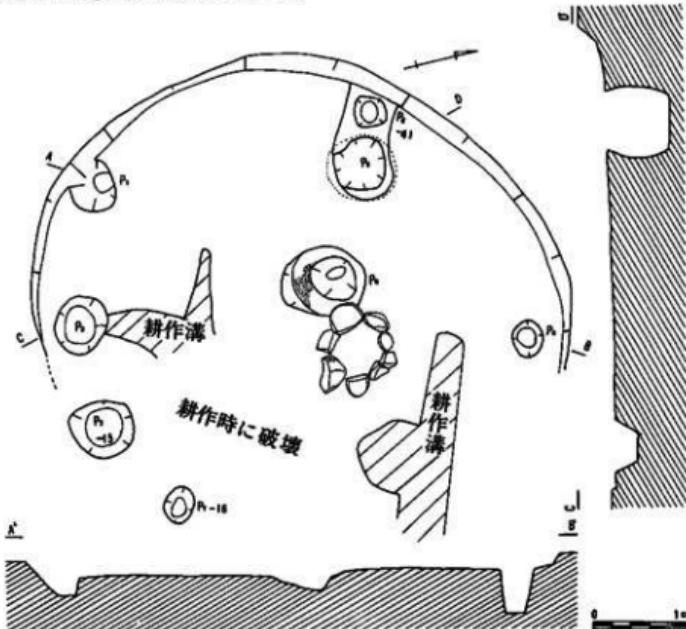
第1節 住居址

第1号住居址（第4図、図版2）

本住居址は、今回、発掘された住居址のなかでは最も東側に位置しており、そのグリット名はI区C1、C2、C3、D1、D2、D3、E1、E2、E3、F1、F2、F3の12グリットにまたがっていた。表土面より50cm位下ったローム層面を掘り込んで構築された竪穴住居址であり、プランは若干角張り気味ではあるが、ほぼ円形を成し、その規模は南北5m74cm、東西は（耕作による破壊のために東側では残存していないが）推定6m前後を測定できると思われる。

壁は、5~83cmの高さを測り、約半分程は耕作時に破壊され残存しない。床面は若干の凹凸はあるが、全般的には良好とはなっているが、約半分は耕作時に破壊されている。炉は住居址の中心より、やや南側に位置し、規模は南北90cm、東西85cmで、方形の石囲炉で、8個の石より成り立っていた。炉石のなかには石皿も含まれているものもあった。

柱穴及びピットは合計8本あり、深さはP1では28cm、P2は24cm、P3は15cm、P4は44cm、P5は41cm、P7は16cmをそれぞれ測る。P5は袋状になるピットで、その用途は貯蔵穴で、深さは65cmを測る。遺物は加曾利E期のものが大部分であった。

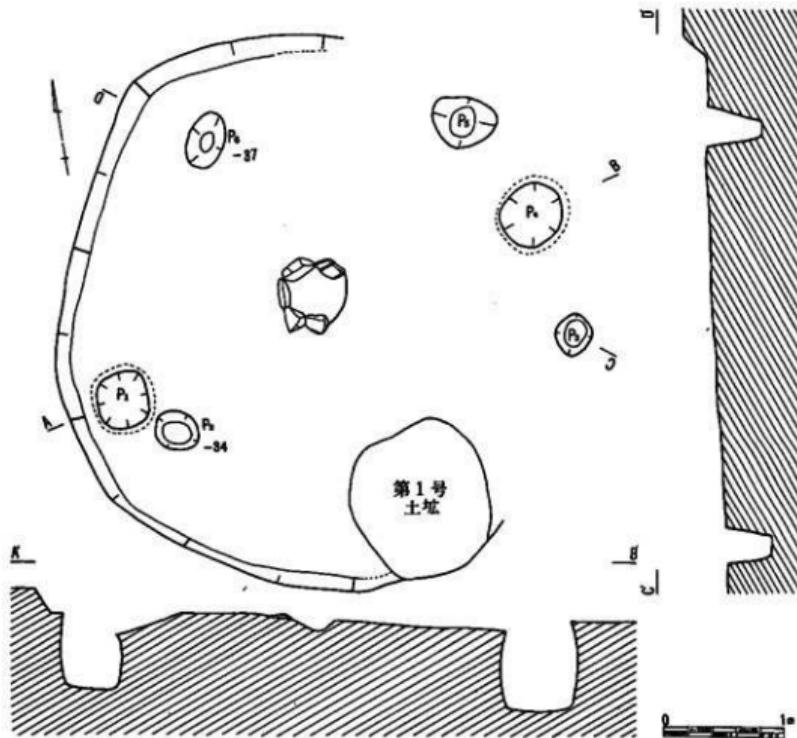


第4図 第1号住居址実測図

第2号住居址（第5図、図版2）

本址はI区の中央部附近、D9、E9、F9、D10、E10、F10の6つのグリットにまたがって発見された。南北は4m51cm、東西は擾乱の為不明ではあるが、推定5m前後を測定できると思われる。構築方法はローム表面を掘り込んだ竪穴住居址である。壁は12~28cmの高さを有し、外傾気味であって、さらに傾斜面であるために東よりの壁は残存していない。床面は若干の凹凸がみられやや軟弱である。東寄りのそれは擾乱による破壊が顕著であった。炉は住居址の中央部に位置し、5個の石より成る方形石器炉である。東側の一角は石が抜き取られた跡が顕著であった。規模は南北60cm、東西55cmを測る。柱穴及びピットは全部で6本発見され、そのうち主柱穴はP2、P3、P5、P6の4本であろう。P1、P4は断面袋状であり、貯蔵穴的な要素が多い。柱穴の深さはP2は84cm、P6は87cm、P3は89cm、P5は45cmであった。

遺物は加曾利E期のものが大部分であった。

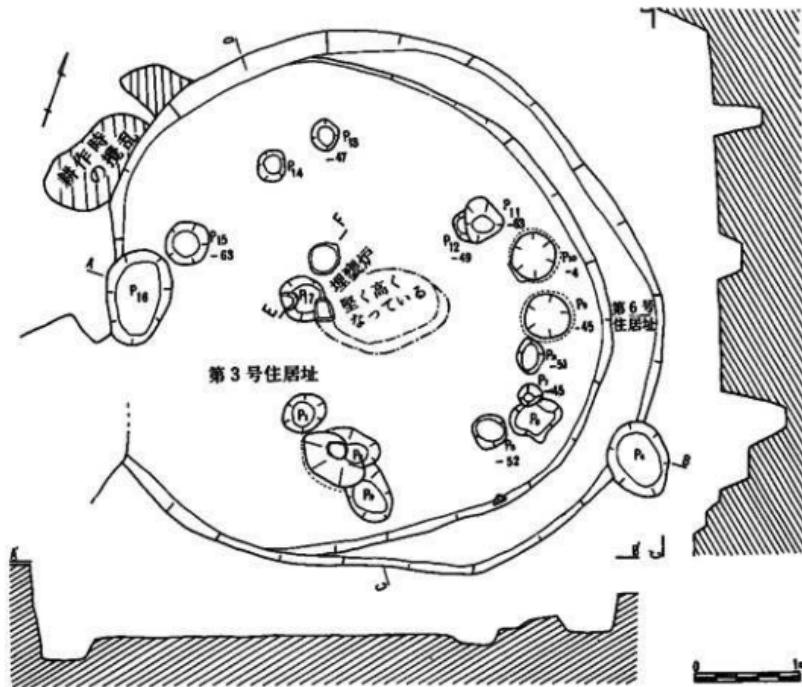


第5図 第2号住居址実測図

第3号住居址（第6～7図、図版8）

本址は第2区のD10、E10、F10、D11、E11、F11、E12の7つのグリットにまたがって発見され、表土面より15cm位下ったローム層面を掘り込んで構築された竪穴住居址である。プランは円形を成し、規模は南北4m70cm、東西5mを測定できる。主軸はN 80°Wの方向に位置している。壁は南側の一部分は土塙や耕作によって破壊されている。壁の状態はほぼ直に立ち上がり、その壁高は24～44cmを計る。炉は住居址のはば中央部に位置し、埋甕炉の形態を成しており、正位の状態で埋めてあったが、下半分は欠損していた。甕の周囲は木炭の混入が顕著であった。埋甕は縄文中期初頭に位置づけられる土器であり、したがって、本址は縄文中期初頭に編年づけられる。

柱穴及びピットは合計17個検出された。本址の主柱穴は第6号住居址との切り合い関係のために明確なる把握はできないが、察するに主柱穴はP18、P15、P1、P5、P11であろう。P9、P10は袋状を呈し貯蔵穴の要素を有うことができよう。炉の南側は若干高くなり、しかも堅かったが何の為に、このような状態になったかは不明である。



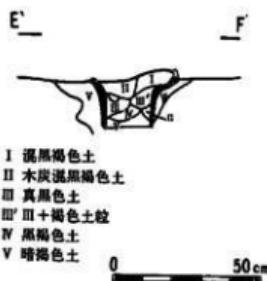
第6図 第3号・6号住居址実測図

第4号住居址（第8～9図、図版8）

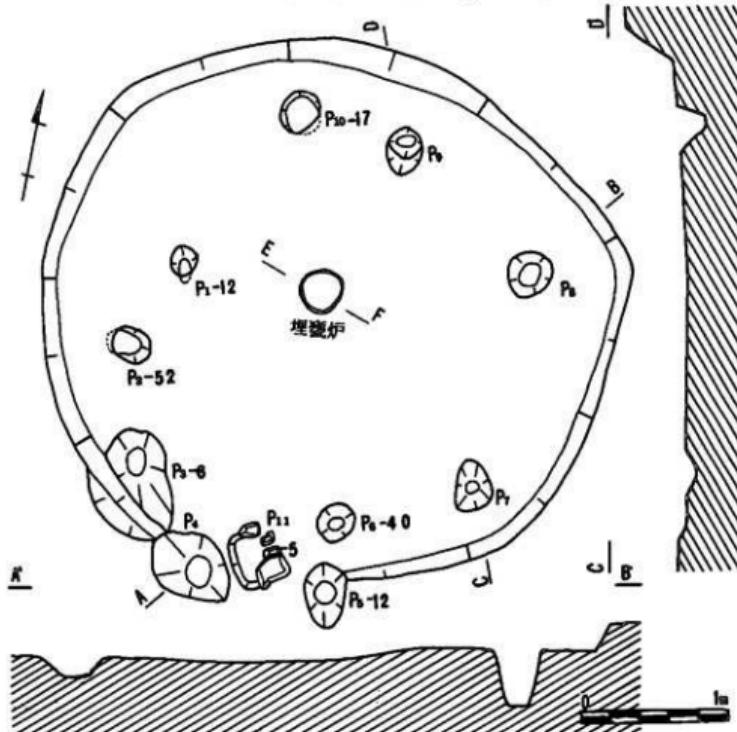
本址は第3号住居址の北側に発見された住居址である。南北8m70cm、東西4mの円形プランを呈する堅穴住居址である。壁高は北、東が高く、南、西は低い。状態としては、傾斜して立ちあがっている。主軸はN81°Wの方向をさしている。

床面はほぼ平坦で、やや軟弱となっていた。炉は住居址の中心部よりやや北側によったところに位置し、埋甕炉の形態をとっている。埋甕は正位の状態で埋めてあり、下部は欠損していた。柱穴及びピットは全部で10ヶ所発見され、主柱穴として考えられるのは、P2、P6、P8、P10であろう。P10、P1、P2は断面袋状を呈する。

本住居址の時期は埋甕炉からして縄文中期初頭の住居址と考えられる。



第7図 第3号住居址炉址断面図



第8図 第4号住居址実測図

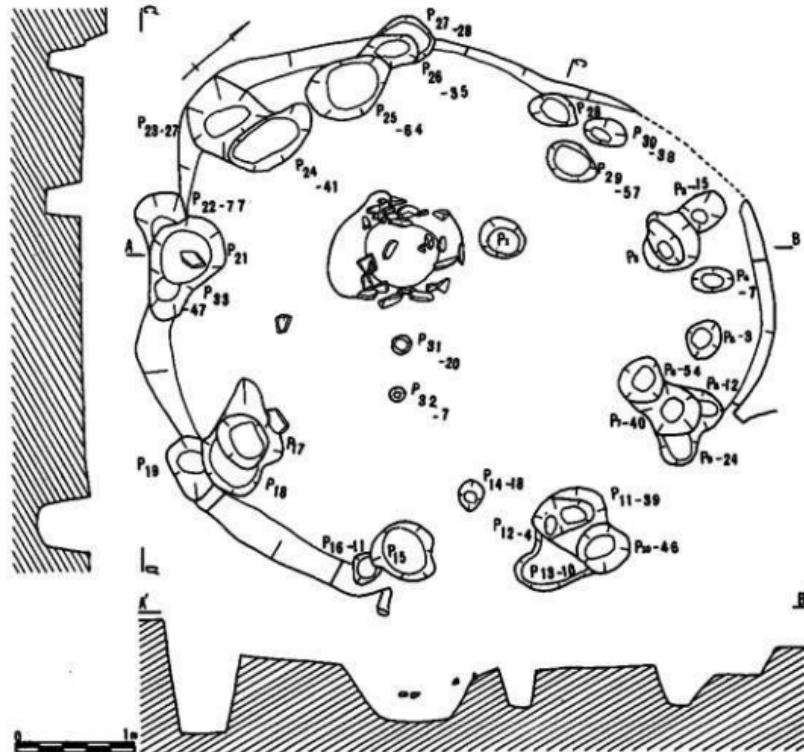
第5号住居址（第10図、図版4）

本址は今回発掘された住居址中では、最北部にあり、南北4m60cm、東西5m10cmの大きさで、東西に長い、長円形プランを呈する竪穴住居址である。主軸はN 51°Wの方向を向いている。

壁の状態は搅乱がはなはだしくて、一部検出が不可能な部分も認められた。壁高は概略で82cm前後を測る。炉は住居址の中心部よりやや北側に位置し、すりばら状に落ち込む、長方形の石圓炉と思われ、使用されている石は小さな石であった。炉の規模は南北1m15cm、東西85cmを計る。多数のピットが検出された。ほとんど柱穴状のものと考えられ、本址はこれらの柱穴の状態からみると3回程度の建てかえがあったと考えられる。遺物は加曾利E期のものが大部分であった。



第9図 第4号住居址炉址断面図



第10図 第5号住居址実測図

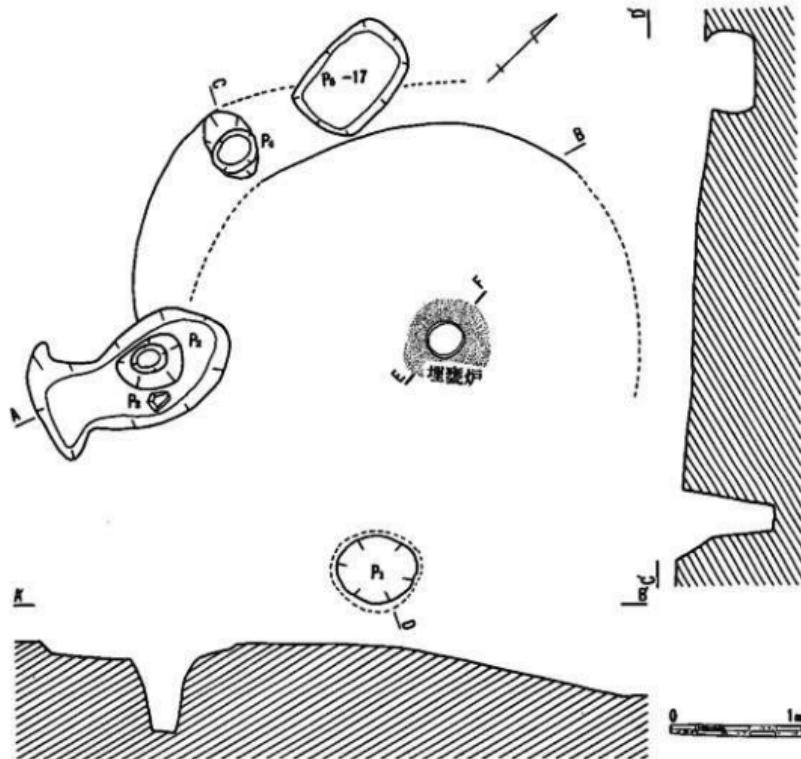
第6号住居址（第6図、図版3）

本址は大部分が第3号住居址に切られてしまっているので、その実態は全くといつていい程わからない。ただ、プランは円形の窪穴住居址と思われる。また時代は第3号住居址より古いことは事実である。遺物は何も出土しなかった。

第7号住居址（第11～12図）

ブルトーザーの土取り、作業中に発見された住居址であるために、規模・プラン・床面等々の状態は不明、炉は埋廐炉であり、周囲に多量の焼土が検出された。埋廐は正位の状態で埋められた。時代は縄文中期初頭である。

（飯塚政美）



第11図 第7号住居址実測図

第2節 土 塚

第1号土塚（第13図、図版4）

第2号住居址の南側の床面を掘り込んで構築された土塚で南北1m85cm、東西1m30cmの規模をもっている。プランは若干角張ってはいるが、円形プランを呈している。深さは55cm位にローム層を掘り込んでいる。壁面は外傾しており、かたいタタキになっていた。床面は平坦であって、かたいタタキとなっていた。石が入っていた。

遺物は加曾利E期が大部分であった。

（友野良一）



第2号土塚（第14図、図版3）

本土塚は第2号住居址の南西の一角に検出された。南北1m6cm、東西1m20cmの規模を有し、ところどころで角張り気味ではあるが全般的に長円形プランを呈し、深さは1mに達している。壁面は外傾気味で、わずかに段を持ち、たたき状になっていた。

床面はすりぼら状になり、中央部が凹み、わずかなタタキとなっていた。

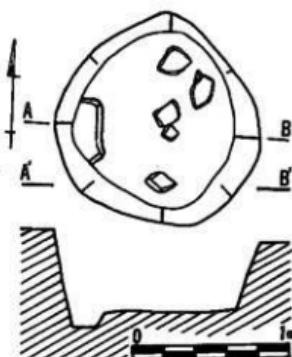
遺物は何も出土しなかった。

第3号土塚（第15図、図版8）

本土塚は第3号住居址に切られ、検出された遺構である。ローム層を掘り込んで構築されており、その大きさは南北1m55cm、東西55cm程で、不整長円形を呈している。壁高は数cmで外傾が強い、床面はほぼ平坦で、かたいタタキになっている。

遺物は何も出土しなかった。

第12図 第7号住居址炉址断面図

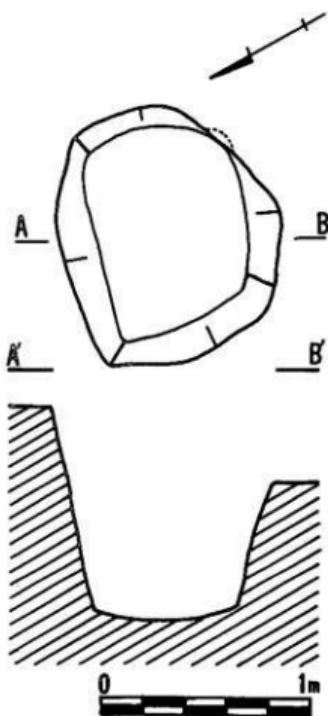


第13図 第1号土塚実測図

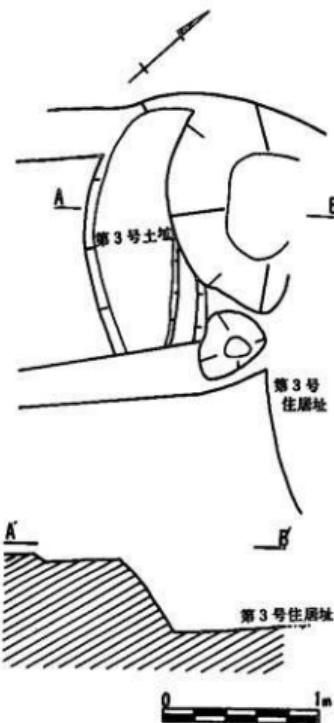
第4号土塚（第16図、図版4）

第3号土塚に接して検出された土塚である。壁高は15~20cmを計り、外傾が鋭い。規模は南北85cm、東西79cm程で、円形プランを呈する。床面はローム層のかたいタタキで、中央部より西側は平坦、中央部より東側は急傾斜の状態を成している。床面上に密着したり、数cm浮いて3個の石が存在していた。これらの石は花崗岩が主体を成しており、小沢川水系のものと考えられる。

遺物は何も出土しなかった。



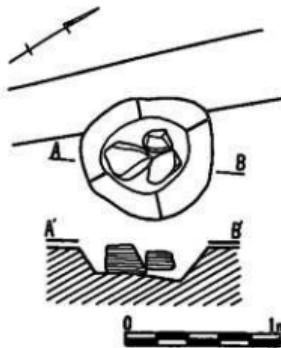
第14図 第2号土塙実測図



第15図 第3号土塙実測図

第5号土塙（第17図）

本土塙は最も南側の位置に発見された遺構である。北側は、若干、角張ってはいるが、大般、円形プランを呈し、その規模は南北 $1\text{m}40\text{cm}$ 、東西 $1\text{m}15\text{cm}$ を測定できる。壁は西側では内窓が強く、段を有し、東側は外傾している。その高さは 15cm 内外である。床面はわずかなタタキになつており、凹凸が著しい。床面の北側の位置に小ピットが存在していたが、その用途は不明である。遺物は何も出土しなかった。



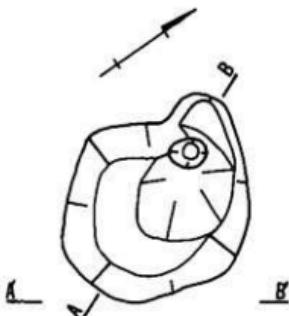
第16図 第4号土塙実測図

第6号土塙（第18図）

本土塙は最も西側に発見された土塙である。規模は南北1m90cm程を測定できた。プランは長円形状を呈していた。壁の状態は北側はわずかに弯曲気味で、南側は外傾が強い。

床面はローム層の極めて良好なる叩きで、起伏が著しかった。特に南側の落ち込みは複雑多岐であった。また、この一部はピット状になっていた。これは用途不明であった。

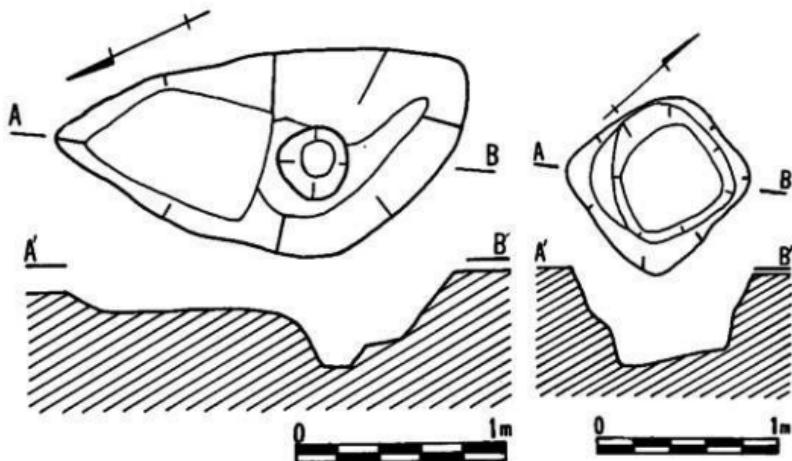
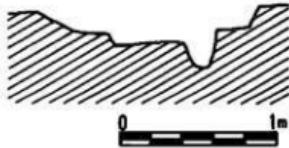
遺物は何も出土しなかった。



第7号土塙（第19図）

本土塙は第7号住居址の北西の位置に検出された遺構で、南北85cm、東西82cmで、隅丸方形形状のプランを呈している。壁高は東側で45cm、西側で55cm前後を測定できた。状態はローム層をわずかに叩いてあり、途中に幾段も段を有している滑めらかな外傾を成している。中央部は一段下って小さなピット状の土塙があったが、発掘段階では切り合い関係は不明であった。床面はローム層をわずかにたたいて構築してあり、わずかに凹凸が認められ、東から西へ傾斜していた。遺物は何も出土しなかった。

（飯冢政美）



第18図 第6号土塙実測図

第19図 第7号土塙実測図

第Ⅳ章 遺 物

第1節 土 器

土器の説明は表を作成し、一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容説明を附記しておくこととする。

胎土、保存状態、色調についての記述は、明らかなる基準によったものではなく、筆者の主觀によるものである。

(飯塚政美)

| 図版 | 番号 | 胎 土 | 保存状態 | 色 調 | 厚さ (mm) | 文様の特徴 | 備 考 |
|----|----|-------|------|-----|------------|----------|--------|
| 7 | 1 | 多量の長石 | 普 通 | 明褐色 | 7 | 沈線 | 第1号住居址 |
| " | 2 | 多量の雲母 | " | 茶褐色 | 6 | 繩文 | " |
| " | 3 | 少量の長石 | " | 赤褐色 | 6 | 刺突文・沈線 | " |
| " | 4 | " | 良 好 | 黒褐色 | 7 | " | " |
| " | 5 | " | 普 通 | 黄褐色 | 10 | 隆帯・沈線 | " |
| " | 6 | " | 良 好 | 赤褐色 | 8 | 隆帯・刻目 | " |
| " | 7 | 多量の長石 | " | 明褐色 | " | 隆帯・刻目・沈線 | " |
| " | 8 | 少量の長石 | " | 黄褐色 | 7 | 隆帯・沈線 | " |
| " | 9 | " | 普 通 | 茶褐色 | 6 | " | " |
| " | 10 | " | " | 明褐色 | 12 | 沈線・刺突文 | " |
| " | 11 | 多量の長石 | " | " | 8 | 隆帯・刺突文 | " |
| " | 12 | " | 不 良 | 黄褐色 | 9 | 沈線 | " |
| " | 13 | 多量の雲母 | " | 赤褐色 | 8 | 無文 | " |
| " | 14 | " | 普 通 | " | 10 | 繩文 | " |
| " | 15 | 少量の長石 | " | 明褐色 | 5 | 無文 | " |

第1表 出土土器の形状一覧表

| 図版 | 番号 | 胎 土 | 保存状態 | 色 調 | 厚さ (mm) | 文様の特徴 | 備 考 |
|----|----|-------|------|-----|------------|----------|--------|
| 8 | 1 | 少量の長石 | 良 好 | 茶褐色 | 9 | 繩文 | 第2号住居址 |
| " | 2 | 少量の雲母 | 普 通 | " | 8 | 隆帯・沈線 | " |
| " | 3 | 多量の長石 | 良 好 | " | 7 | " | " |
| " | 4 | " | 普 通 | 赤褐色 | 8 | " | " |
| " | 5 | 多量の雲母 | 良 好 | 明褐色 | 8 | 粘土紐 | " |
| " | 6 | " | " | 赤褐色 | 18 | 隆帯・ね縄・刻目 | " |
| " | 7 | " | 普 通 | " | 8 | 粘土紐 | " |
| " | 8 | 多量の長石 | " | 茶褐色 | 8 | 繩文・沈線 | " |
| " | 9 | 少量の長石 | 良 好 | 黒褐色 | 7 | " | " |
| " | 10 | 多量の長石 | 普 通 | 茶褐色 | 8 | 繩文・沈線・隆帯 | " |
| " | 11 | 少量の雲母 | 不 良 | 明白色 | 10 | 刺突文 | " |
| " | 12 | 多量の雲母 | 良 好 | 黒褐色 | 11 | 隆帯・沈線 | " |
| " | 13 | 少量の長石 | " | " | 6 | 沈線 | " |
| " | 14 | " | " | 茶褐色 | 10 | 無文 | " |
| " | 15 | " | " | " | 7 | " | " |

第2表 出土土器の形状一覧表

| 図版 | 番号 | 胎 土 | 保存状態 | 色 調 | 厚さ (mm) | 文様の 特徴 | 備 考 |
|----|----|-------|------|------|------------|-----------|--------|
| 9 | 1 | 多量の雲母 | 普通 | 赤褐色 | 10 | 隆帯・抽象文 | 第3号住居址 |
| " | 2 | " | " | 黄褐色 | 11 | 隆帯・刻目 | " |
| " | 3 | 多量の長石 | 不良 | 赤褐色 | 9 | 隆帯・沈線 | " |
| " | 4 | 少量の長石 | " | 赤褐色 | 8 | 隆帯・沈線・刻目 | " |
| " | 5 | " | 良 好 | 黒褐色 | 9 | 隆帯・刻目・爪形文 | " |
| " | 6 | 多量の雲母 | " | 茶褐色 | 10 | 粘土紐刻目・爪形文 | " |
| " | 7 | " | 普通 | " | 8 | 隆帯 | " |
| " | 8 | 少量の長石 | 不 良 | 明褐色 | 9 | " | " |
| " | 9 | 少量の雲母 | 良 好 | 黒褐色 | 10 | 粘土紐 | " |
| " | 10 | 少量の長石 | 不 良 | 明褐色 | 7 | " | " |
| " | 11 | 多量の長石 | " | 黄褐色 | 10 | 隆線・沈線・刻目 | " |
| " | 12 | 多量の雲母 | " | 黒茶褐色 | 11 | 無文 | " |

第3表 出土土器の形状一覧表

| 図版 | 番号 | 胎 土 | 保存状態 | 色 調 | 厚さ (mm) | 文様の 特徴 | 備 考 |
|----|----|-------|------|-----|------------|-----------|--------|
| 10 | 1 | 多量の長石 | 不 良 | 黒褐色 | 7 | 網文・刺突文 | 第4号住居址 |
| " | 2 | " | " | " | 6 | " | " |
| " | 3 | " | " | " | 6 | 隆線・網文・刺突文 | " |
| " | 4 | " | " | " | 6 | 網文 | " |
| " | 5 | 多量の雲母 | 良 好 | " | 7 | 沈線 | " |
| " | 6 | 少量の雲母 | 不 良 | 黒褐色 | 10 | 隆帯 | " |
| " | 7 | 少量の長石 | 普通 | 赤褐色 | 11 | 隆帯・爪形文 | " |
| " | 8 | 多量の長石 | " | 黒褐色 | 7 | 隆帯・刻目・沈線 | " |
| " | 9 | 多量の長石 | 不 良 | 茶褐色 | 9 | 隆帯・沈線 | " |
| " | 10 | 少量の長石 | " | 赤褐色 | 7 | 無文 | " |
| " | 11 | " | " | " | 8 | 無文・隆帯 | " |
| " | 12 | " | " | " | 8 | " | " |
| " | 13 | " | " | " | 8 | 無文 | " |

第4表 出土土器の形状一覧表

| 図版 | 番号 | 胎 土 | 保存状態 | 色 調 | 厚さ (mm) | 文様の 特徴 | 備 考 |
|----|----|-------|------|-----|------------|----------|--------|
| 11 | 1 | 多量の雲母 | 良 好 | 明褐色 | 10 | 隆線・沈線・網文 | 第5号住居址 |
| " | 2 | 多量の長石 | 普通 | 茶褐色 | 7 | 沈線 | " |
| " | 3 | 多量の雲母 | 良 好 | 黒褐色 | 11 | 隆線・沈線・網文 | " |
| " | 4 | 少量の長石 | 普通 | 明褐色 | 7 | 沈線・粘土紐 | " |
| " | 5 | 多量の雲母 | 良 好 | 黒褐色 | 9 | 沈線・網文・隆線 | " |
| " | 6 | " | " | 茶褐色 | 7 | 粘土紐 | " |
| " | 7 | " | " | 明褐色 | 10 | 隆線・沈線 | " |
| " | 8 | 多量の長石 | 普通 | 黒褐色 | 9 | 沈線・網文 | " |

第5表 出土土器の形状一覧表

| 図版 | 番号 | 胎 土 | 保存状態 | 色 調 | 厚さ (mm) | 文様の特徴 | 備 考 |
|----|----|-------|------|------|------------|-------|--------|
| 12 | 1 | 多量の雲母 | 良 好 | 赤褐色 | 6 | 縦帶・刻目 | 第7号住居址 |
| " | 2 | " | " | " | 6 | " | " |
| " | 3 | " | " | " | 6 | " | " |
| " | 4 | " | " | " | 6 | " | " |
| " | 5 | " | " | " | 6 | " | " |
| " | 6 | " | " | " | 6 | " | " |
| " | 7 | 少量の長石 | 普 通 | 赤褐色 | 13 | 沈線・刻目 | " |
| " | 8 | " | " | " | 13 | " | " |
| " | 9 | " | 良 好 | 明黄褐色 | 7 | 縦線 | " |
| " | 10 | 多量の雲母 | 普 通 | " | 9 | 無文 | " |
| " | 11 | 少量の雲母 | " | " | 10 | " | " |
| " | 12 | " | " | " | 11 | " | " |
| " | 13 | " | 良 好 | " | 10 | " | " |

第6表 出土土器の形状一覧表

| 図版 | 番号 | 胎 土 | 保存状態 | 色 調 | 厚さ (mm) | 文様の特徴 | 備 考 |
|----|----|-------|------|------|------------|----------|-------|
| 13 | 1 | 多量の雲母 | 不 良 | 茶褐色 | 7 | 無文 | 第1号土塗 |
| " | 2 | " | " | " | 7 | " | " |
| " | 3 | 多量の長石 | 良 好 | 明黄褐色 | 6 | 縦線・沈線 | " |
| " | 4 | " | 普 通 | " | 6 | 沈線 | " |
| " | 5 | 多量の雲母 | " | 赤褐色 | 7 | 粘土紐 | " |
| " | 6 | 多量の長石 | 不 良 | " | 6 | 縦帶 | " |
| " | 7 | " | 良 好 | 黒褐色 | 7 | 縦帶・沈線 | " |
| " | 8 | 少量の長石 | " | 明黄褐色 | 9 | 縦帶 | " |
| " | 9 | 多量の雲母 | 不 良 | 赤褐色 | 6 | 範文 | " |
| " | 10 | 多量の長石 | 普 通 | 黒褐色 | 7 | 縦線・範文・綾文 | " |
| " | 11 | 少量の長石 | 良 好 | 茶褐色 | 8 | 縦線・沈線・範文 | " |
| " | 12 | 多量の雲母 | 不 良 | 赤褐色 | 9 | 縦線 | " |
| " | 13 | " | " | " | 5 | 無文 | " |

第7表 出土土器の形状一覧表

第2節 石 器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版、番号、名称、器形、石器、備考である。
(飯塚政美)

| 図版 | 番号 | 名 称 | 器 形 | 石 質 | 備 考 |
|----|----|------|-----|-----|--------|
| 14 | 1 | 打製石斧 | 短冊形 | 粘板岩 | グリット |
| " | 2 | " | " | " | " |
| " | 3 | " | " | " | 第1号土塗 |
| " | 4 | " | 擾 形 | " | 第3号住居址 |
| " | 5 | " | " | 砂 岩 | グリット |
| " | 6 | " | 短冊形 | " | " |
| " | 7 | " | " | " | 第4号住居址 |
| " | 8 | 凹 石 | " | 花崗岩 | 第3号住居址 |

第8表 出土石器の形状一覧表

| 図版 | 番号 | 名 称 | 器 形 | 石 質 | 備 考 |
|----|----|------|-------|-------|---------|
| 15 | 1 | 磨製石斧 | 乳 棒 状 | 綠 泥 岩 | 第7号住居址 |
| " | 2 | " | 定 角 式 | 蛇 紋 岩 | グ リ ッ ト |
| " | 3 | " | " | " | 第5号住居址 |
| " | 4 | 皮 刷 | | 綠 泥 岩 | グ リ ッ ト |
| " | 5 | 石 匙 | | チャート | グ リ ッ ト |
| " | 6 | 磨製石斧 | 乳 棒 状 | 綠 泥 岩 | 第4号住居址 |
| " | 7 | 石 匙 | | 粘 板 岩 | 第3号住居址 |
| " | 8 | " | | 砂 岩 | 第1号住居址 |
| " | 9 | 凹 石 | | 花 岗 岩 | グ リ ッ ト |

第9表 出土石器の形状一覧表

第V章 ま と め

今回の発掘調査で、検出された遺構は住居址、土塁であった。発掘調査地区が限定されたり、また時間的な余裕がないために、問題点を重点的に簡潔に述べてみたい。

検出された遺構は全て縄文時代の住居址と土塁であって、大きく考えてみると全て縄文中期時代に含まれていると思われる。住居址を編年にして細分してみると縄文中期初頭4軒、縄文中期後葉3軒である。

住居址を考えてみるとその主たる項目であるプラン、周溝の有無、炉の有無、形状、状態、埋甕等について解説を加え、全般的に把握をしていきたいと思う。

プランは第7号住居址のように全く不明なものを除いて、大抵円形状を成していた。周溝は7軒ともどれにも存在していなかった。炉は二種類に大別でき、一つは埋甕炉であり、一つは石圓炉である。前者の第3号住居址、第4号住居址、第7号住居址、後者のには第1号住居址、第2号住居址、第5号住居址がそれぞれ属している。第6号住居址は炉の形態は現存していないが、第3号住居址の切り合ひ関係から察して埋甕炉の形態が濃厚の様に思われる。

埋甕炉の状態を住居址ごとに特徴を述べてみると次のように考えられる。

第3号住居址、第4号住居址、第7号住居址のは正位の状態で、下部が欠損し、周囲に木炭が検出されていた。位置は第3号住居址では大抵中央部附近、第4号住居址では中央部よりやや北側に、第7号住居址は全体のプランが不明なために断定できない。

石圓炉の状態を住居址ごとに特徴を述べてみると次のように考えられる。

第1号住居址、第2号住居址のは割合に大きな石を使用し、第5号住居址のは小さな石で凹み状になっていた。位置は第1号住居址では中央部よりやや南側、第2号住居址のはやや中央部、第5号住居址のは中央部よりやや北側にそれぞれある。

住居址の時代決定は埋甕炉に関連したのは縄文中期初頭から縄文中期中葉の初頭に。石圓炉に関連したのは縄文中期後葉に決定でき得るであろう。一般的に住居址の南側、あるいは東側の位置に床面を掘り込んで埋められた土器（埋甕）はどの住居址からも検出されなかつた。

住居址内より出土した土器を縄年学的に究明してみると、梨久保式、平出8A式、藤内式、井戸尻式、曾利式と縄文中期全般に通じていることがわかつた。

土塗は全部で7基検出され、プランは円形及び長円形状が大部分で、大きさは多種多様であつた。遺物は第1号土塗内から出土しただけであつて、他の土塗内からの出土は全く無かつた。しかし、周辺の状況あるいは7軒の住居址の関係からして広く言う縄文中期時代に属していると思われる。

石器は20数個出土した。全て縄文中期時代に属しており、その形態は次のようにある。

打製石斧のなかで短冊形、撥形、磨製石斧のなかで乳棒状、定角式、凹石、皮剥、石匙等であった。これらの石器に利用されている石質は粘板岩、砂岩、花崗岩、綠泥岩、蛇紋岩、チャート等々であった。

最後に、西駒ヶ岳の吹きおろしのまだ寒い4月下旬から農家の多忙時期に調査を開始した。発掘当初は期待していた割合には遺構や遺物が少なかつた。このような理由で意氣昂らぬ日もあつたかと思われた。調査進行は順調で、ほぼ計画通り現場発掘調査を無事終了できたのは、関係機関、関係者御一団の惜しまぬ支援と配慮を賜わつた。さらに、発掘作業員の皆様が、中央道遺跡発掘、土地改良事業遺跡発掘等々数多くの調査に参画された経験を生かし、今度の調査に臨んでいただけたことが発掘調査進行の上に大きな原動力となつたことは何人も疑うことのできない事實と思われる。また、短期間での遺物整理、原稿執筆を経て、ここにこのような報告書をまとめることのできたのは、調査団全員の努力の賜であり、関係各位に対し厚く御礼申し上げる次第であります。なお、当遺跡に關連した出土遺物、図面等は伊那考古資料館へ永久保存という形で保管してあります。

(篠塚政美)

図 版



遺跡地を東側より眺む



遺跡地を北側より眺む



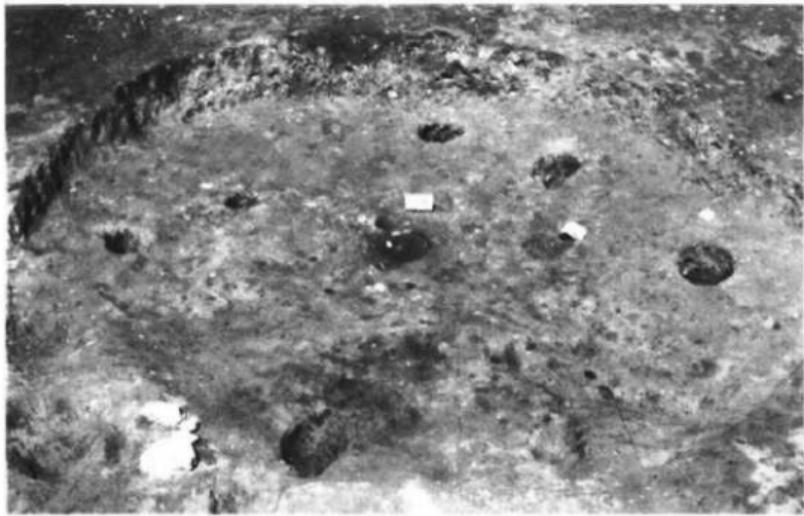
第1号住居址



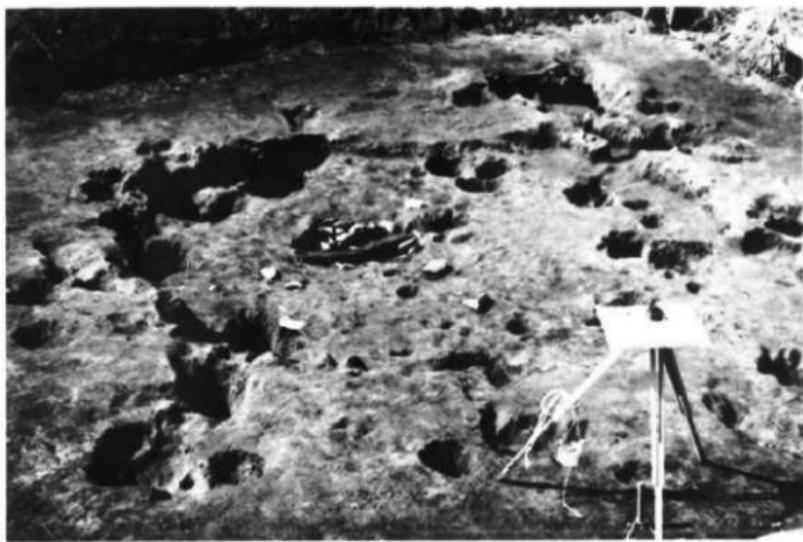
第2号住居址



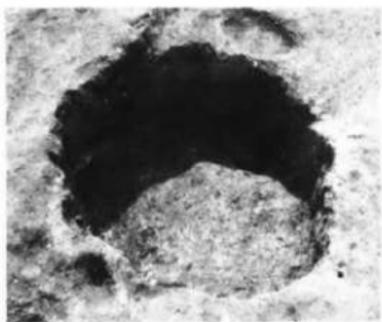
第3・6号住居址・第2・3号土塁



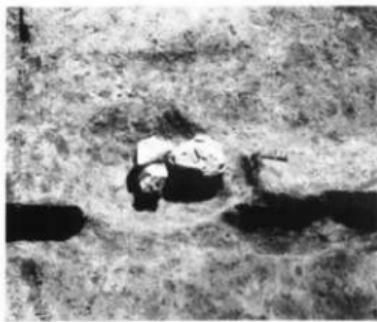
第4号住居址



第5号住居址



第1号土塙



第4号土塙



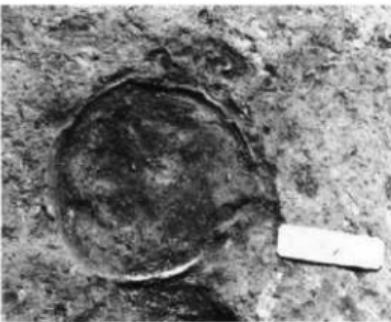
第1号住居址炉址



第2号住居址炉址



第3号住居址炉址上面



第4号住居址炉址上面



第3号住居址炉址断面



第4号住居址炉址断面



石器出土状况



石器出土状况



土器出土状况



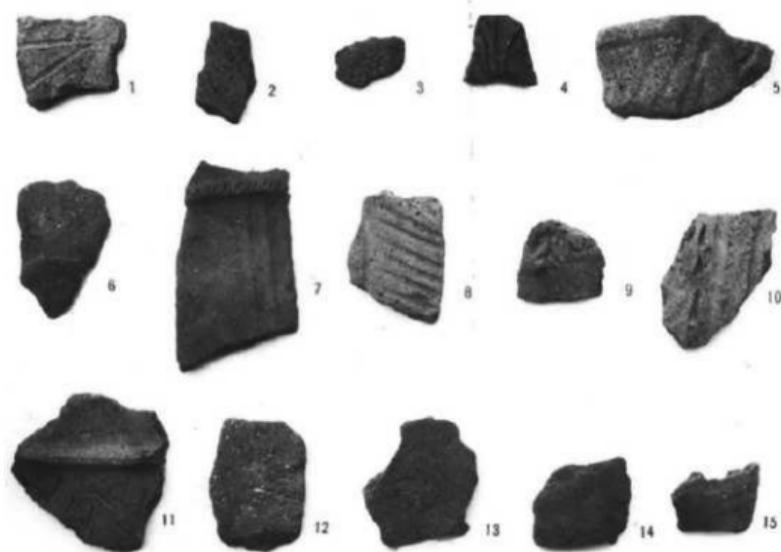
土器出土状况



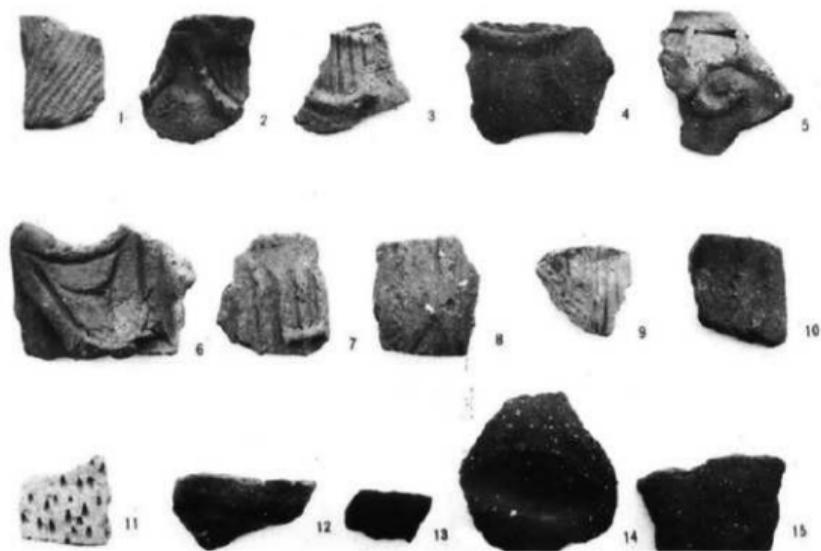
土器出土状况



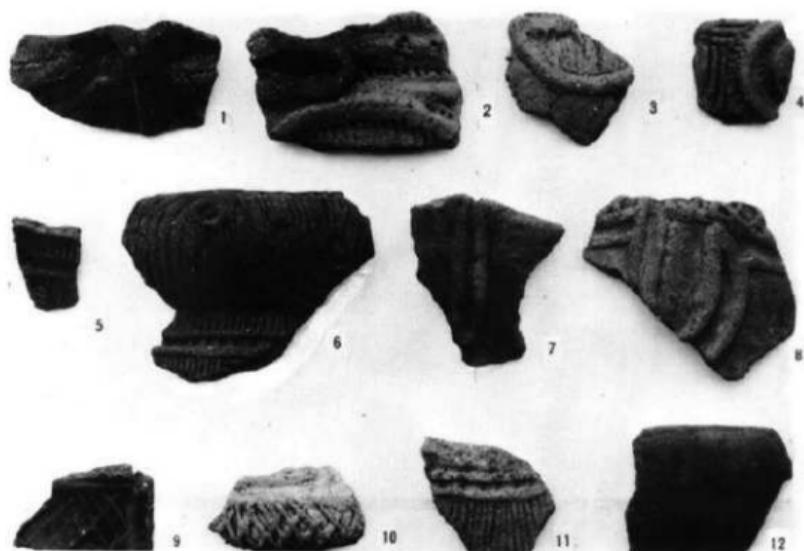
土器出土状况



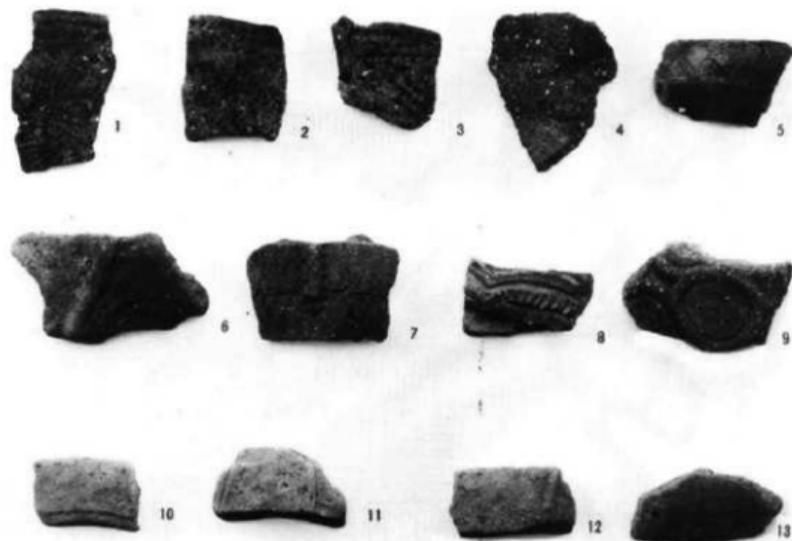
图版7 出土土器



图版8 出土土器



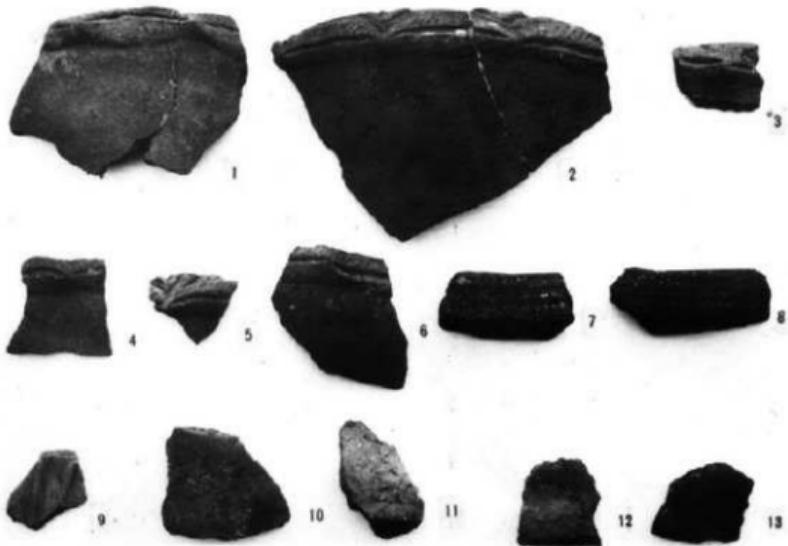
図版9 出土土器



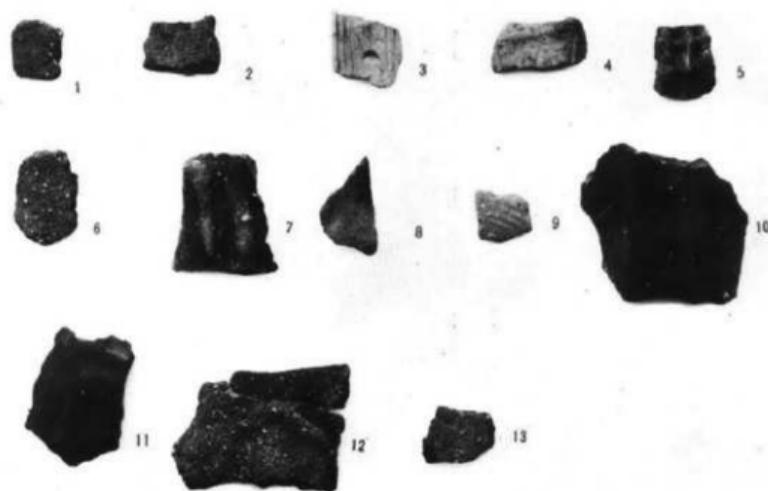
図版10 出土土器



圖版11 出土土器



圖版12 出土土器



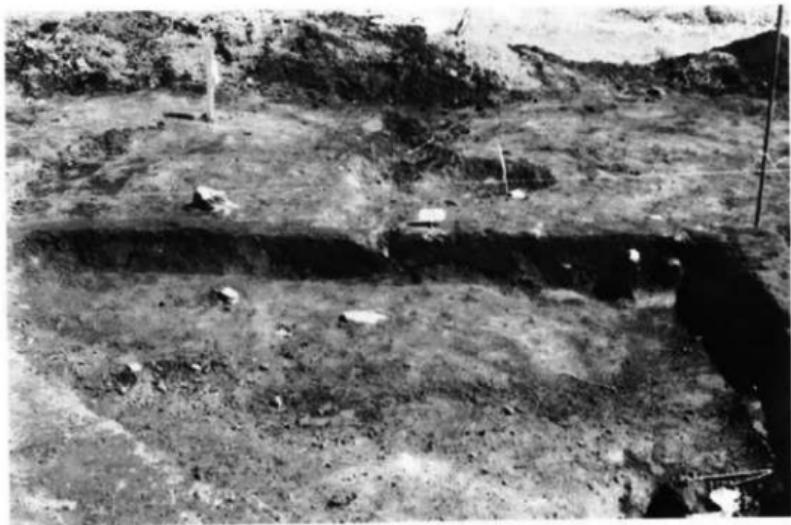
圖版13 出土土器



圖版14 出土石器



図版15 出土石器



図版16 住居址の土層埋没状況

八人塚遺跡
—緊急発掘調査報告—

昭和54年3月15日 印刷
昭和54年3月17日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会
印刷所 長野県伊那市下春日町
(有)千代田印刷

